

令和 6 年 4 月 1 日

会員各位

(一社) 長野県理学療法士会

会長 佐藤 博之

学術大会部 森本 正道

第 52 回長野県理学療法学会学術大会発表演題に対する表彰について

(一社) 長野県理学療法士会 学術大会表彰規定に基づき、令和 5 年 7 月 22 日に第 52 回長野県理学療法学会学術大会の発表演題に対する学術表彰選考会議が開かれ、以下のように決定されましたので報告いたします。なお、表彰式は、本年度、第 53 回長野県理学療法学会学術大会にて開催します。

最優秀賞受賞演題 (1 演題)

演 題 名 : 「一般病院におけるブレーデンスケールの再検討」

演者所属 : 富士見高原医療福祉センター病院

演者氏名 : 平出 怜

褥瘡により患者本人の苦痛はもとより、合併症の発生、強いては入院期間の延長と入院費の増加が生じることは、大きな問題点であることが発表冒頭で述べられていた。そして、リハビリテーションを進めるうえでも大きな支障となる。本発表は、ブレーデンスケールを用いた評価に対し、褥瘡発生予測の妥当性を識別と較正を用いて再検討された。幅広い診療科から対象者を抽出し、得られた結果は、多くの医療関係者が参考にできる内容であった。今後、ブレーデンスケールが 10 点以下の症例からの褥瘡の発生について更なる調査・精査と検討を期待したい。

優秀賞受賞演題 (2 演題)

演 題 名 : 「肩手症候群に対して新しい補装具によるポジショニングが有効であった脳出血例」

演者所属 : 健和会病院

演者氏名 : 林 泰堂

肩手症候群はリハビリテーションを進めていく上で、機能回復の大きな阻害因子となる。寝返りや起き上がり動作時の肩関節への機械的ストレスを軽減させるために、新しく開発作成された装具により、従来の三角巾やアームスリングよりも簡便に装着でき、ポジショニングが管理できるようになり、かつ、手背皮膚温の測定により従来のポジショニング方法に比べて効果があったことは、非常に興味深い内容である。また、病棟ナースと経過を観察されて良い連携がとれていたことも、今後、実用性が高いツールになるであろう。今後、有効な症例が増え、統計学的に装具の有効性が示されることを期待する。

演題名：「地域在住高齢者におけるフレイルとヘルスリテラシーおよび主観的認知機能低下の関係」

演者所属：松本市立病院

演者氏名：横山 舞鈴

地域住民が自ら健康について意識をもってフレイル予防に取り組むことが大切で、自助・互助・共助・公助それぞれから施策・対策がされている昨今、ヘルスリテラシーを意識しない、あるいはできない人への対策が急務であることは推察される。本研究では、多くのデータの解析を行った結果、主観的認知機能の有無にかかわらず、フレイルはヘルスリテラシーと関連していることが示されており、前述の必要性を示唆する内容であった。今後のフレイル予防のあり方を示唆するものとして社会に対する貢献性は大きい。

学術奨励賞受賞演題(1 演題)

演題名：「食道癌進行による食道気管瘻及び閉塞一步手前の狭窄に対してデュモンステント（気管～両側主気管支ステント）を留置した症例における喀痰喀出の簡便な方法の検討」

演者所属：相澤病院

演者氏名：黒岩 和弥

デュモンステントという気管から両側主気管支に入れるステントを留置後の喀痰喀出の方法についての臨床研究であった。セラピーボールを用いて腹圧を高めて痰を喀出するという、繊毛運動が消失した状態で効果的に喀痰喀出する方法、かつ退院後簡単に自己喀出できる方法を考案された。そして臨床で実施され効果を得たことは、今後、同様な症例に対して応用できる可能性を与えた。珍しい症例を報告くださり勉強できた聴衆も多かったと思う。今後、更なる介入方法の検討や介入効果の実証を行って、患者様の満足度を高められることを期待する。

特別賞受賞演題(2 演題)

演題名：「脳卒中のリハビリテーションに関して最も影響力のある50本の論文：計量書誌学的分析」

演者所属：長野保健医療大学

演者氏名：荻原 啓文

近代社会では、様々な文献がデータ化されたことにより、計量書誌学が急速に普及した。本研究もリハビリテーションに関する文献を、その手法で分析された。その中で、最近の研究において非侵襲的脳刺激手法、BIC、ロボットリハビリテーションといったトピックが注目されていた。理学療法研究ではあまりされていない研究方法で研究して発表されたことは、発表を聞いた聴衆にも参考となり、貢献性は大きい。

演題名：「当法人の産業理学療法領域における（健康増進）の初めて試み
～ 健康経営・介護分野との連携，活動から相互作用を見出す～」

演者所属：くろさわ病院

演者氏名：荒井 香織

発表者の所属する法人全体で、腰痛予防を理学療法士が中心となって行っている取り組みの紹介と、試行してからの変化をまとめた発表であった。事前のアンケートにて腰痛予防体操をやってみたいとする方が多く、実際の取り組みを行った後、法人全体として腰痛への意識や行動が良い方向へ変わったことが発表されていた。また、この取り組みの結果、業務効率や生産性向上につながることも考えられ、このような取り組みが現代社会に浸透していくことを願うものである。日本理学療法士協会でも腰痛予防への取り組みが方針として掲げられており、貢献性が高い発表であった。